

メディアウォッチング例会（2019年9月）

第48回 2019年9月25日（水）

ゲスト 山本雅弘 関西民放クラブ会長

テーマ 「何が一番おもしろいんや」からスタート

～脱ラジオ 脱テレビが私の原点～

主な内容

- ◎関西民放クラブと大阪ロータリークラブの二つの活動
- ◎映像番組が競う「地方の時代映像祭」の大阪開催に深く関わる
- ◎震災被災地を支援 「願い事100叶える」活動
- ◎地域貢献が目標 ロータリークラブ
- ◎美術館で「対話型鑑賞法」小学生が実体験
- ◎大阪の文化イベントにもっと組織的支援を
- ◎都市の価値 文化で決まる 官民一体で取り組みを
- ◎人気テレビ番組「仮面ライダー」はこうして誕生した
- ◎手作りのずっしり重い企画書持ってスポンサーへ
- ◎大橋巨泉は完璧主義者 「世界まるごとHOWマッチ」制作の舞台裏
- ◎放送は地域免許 ラジオ時代に自分の活動の原点があった
- ◎放送局の1階は市民に開放 “池”のあるヨーロッパ風のホールから“広場”へ
- ◎芭蕉も一句詠んだ大阪・福島の聖天通りが我がふるさと
- ◎「スーパーリージョナルステーション」 地域に特化した放送局をめざす
- ◎ネットとの融合 情報伝達で実績もつ放送界がリードして進める

司会 まだまだ暑い日が続きます。久しぶりのメディアウオッチングの例会です。今日はメディアウオッチング・スペシャルバージョンとして、山本雅弘新会長（関西民放クラブ）にお話を伺うことになりました。

この4月に会長になられたあと、改めてお話を伺う機会がなく、この際メディアのことはもちろん、新会長の人となりから日常生活まで根掘り葉掘り、いろんな話を伺おうかなと思います。

山本さんにメディアウオッチングの会にスピーカーとしてお越しいただきましたのは、今回で3回目です。1回目は2011年1月20日、まだ現役でいらっしやまして、テーマは①地上テレビのデジタル化問題、②放送界における不祥事と公権力の介入、③世の中の構造的変化と放送企業への影響。この三つのテーマでお話いただきました。2回目2015年1月には、ご存知の『民間放送のかがやいていたころ～ゼロからの歴史 51人の証言』という本を制作した折に、民間放送の営業サイドから見たテレビ・ラジオ番組の軌跡を、事例をふんだんに入れながら語っていただきました。今日は、会長になられて半年、関西民放クラブの活動に参加された印象からおたずねします。

<関西民放クラブと大阪ロータリークラブの二つの活動>

山本氏 ひと言で言うと「こんな楽しい会があっという間」とまず思いました。

皆さん方は各放送局の組織の中で活動されてきて、このクラブに入られた。全く目的が違って、そういう意味ではこの会が、まあ二番目か三番目か分かりませんが、新しい人生の一つになるのでしょうか。

皆さん方楽しくやっておられるということが十分分かりました。とは言いながらお世話されることも大変ですが、理事会もそれぞれの局の組織の会と違って、のどかな雰囲気がただよっているなと感じています。こういう雰囲気のままで、できるだけお互いに協力しながらやっていきたいと思っています。

実は私、大阪ロータリークラブに入っているんですが、丁度理事会が開かれる金曜日は、例会（昼12時15分から）と重なるので、理事会のあとの食事会を失礼しています。大阪ロータリーは再来年100周年を迎えます。その記念企画を考える委員会に加わっていて、あわてて帰らなきゃいけないことがあるんですよ。

いくつかの同好会にエントリーはしています。ゴルフは前から入っているんですが、落語の会、囲碁の会にはまだ一度も顔を出していません。

司会 囲碁は以前からやっておられたんですか。

山本氏 打ったことはありますが、囲碁というのは全く分かってないんです。囲碁、将棋は好きなので、NHKの番組はよく見えています。番組を見たからといってうまくな

るとは思いませんが、しかし面白いですね。

牧野元良（囲碁同好会）さんに“将棋のクラブはないんですね”とたずねたら、“将棋は、あれは人を痛めるものである。囲碁はお互いに仲良く地面（領域）を取り合うものだから、囲碁のほうが平和的でいいんだ”と言われました。囲碁にはそういうつもりで参加させてもらいます。

ともかく己の、趣味の無さを痛感しているのが現状で、皆さん方の活動がうらやましく、まあなんとか一つか二つは一生懸命やれるものを見つけないかと思っています。

司会 もう触れられましたが、ご趣味はなんですかと伺うつもりでした。

山本氏 ゴルフをやったりしていますが、ほんとうに何もないですね。今はお酒を飲めなくなったんですが、飲んだり、マージャンをしたりと割合人とわいわいやるのがすきなんです。東京に23年いて、平成3（1991）年に大阪に戻ってきました。家が会社に近い。毎日放送と新地と我が家は正三角形の頂点にあります。近くのB級グルメの飲み屋で飲んでいて連中が、行っていいかということで、我が家に十数人やってきて、わいわいやっていたりしました。こういったことが大好きなので、機会があれば、そういう場ができたらいいなと思っています。

司会 恐らく皆さんご存知ないと思うんですが、2007年から毎年大阪で開かれている「地方の時代映像祭」はドキュメンタリー番組を中心とした映像祭でNHK、民放、CATVなど全国から多くの制作者が集います。そして表彰式のあとはシンポジウム、懇親会があって、さらに二次会、三次会と続いていくそうです。私は、懇親会はまだしも、二次会、三次会までであるとは知りませんでした。

山本さんはその三次会に参加されるのがお好きだという。在阪局のある役員から社長、会長ともあろう人がこんな時間に映像祭参加の若い人たちと楽しそうに話しておられる、すごい人だなあと思ったという話を聞きました。三次会といったかなり遅い時間になっても、わいわいお話になるのがお好きなんですね。

<映像番組が競う「地方の時代映像祭」の大阪開催に深く関わる>

山本氏 基本的にはそうなんですが、「地方の時代映像祭」とはいろんな形でひっきりがあって、その話をさせてもらいます。

「地方の時代映像祭」というのは1980年に、神奈川県長洲一二知事が就任して「これからは地方の時代だ」というある種、宣言みたいなことをしたんです。

そこで川崎市が、地方局のドキュメンタリー作品の上映会を始めたんです。1980年のことです。

それが長洲知事もおられなくなり財政も厳しくなって、この映像祭はしばらくの間、埼玉県の川越市に移り、同市にある東京国際大学が開催場所を提供していました。

ところが川越市でも開催が難しくなってきたんです。この映像祭は民放連、NHKが絡んでいます。民放連事務局の担当者が上智大学の音好宏教授にご協力願って、このイベントをなくすのはもったいない、何とかならないかと話し合っていました。その頃、もう時効だと思うんですが、関西テレビの「発掘！あるある大事典」の問題が起きていました。実は私、民放連の放送基準審議会の議長で、非常に辛かったんですが、関西テレビの（民放連の）除名、復帰までを担当しました。

関西テレビの報道中心の若い人たちの中には関西テレビ復権の一つの方法として、この「地方の時代映像祭」を大阪で開催する、それも関西テレビが中心になってやりたいという方が何人かおられましたね。

そういう動きがあったんですが、関西テレビの若い人たちだけでは、話がなかなかまとまらないというので、上智大学の音好宏教授や民放連の担当者と話し合った際、「地方の時代映像祭」を大阪でどうかという提案があったのです。関西テレビが中心になって動くということになりましたが、いろいろ難しい問題も出てくるので、（私が）大阪のまとめ役をやってみましょうということになりました。それで在阪テレビ5局、NHKのBKに協力を求め、賛同を得られることになったのです。こんな経緯で「地方の時代映像祭」が大阪開催になったんです。

「地方の時代映像祭」は2007年から大阪が引き継ぎ、現在も続いている映像コンクールです。この会の運営については、主催が吹田市、関西大学、NHK（日本放送協会）と民放連（日本民間放送連盟）、日本ケーブルテレビ連盟、それに在阪民放5局とNHK・BKが協賛ということで加わっています。映像コンクールですから全国から寄せられる応募作品は200本前後になります。放送局部門、ケーブルテレビ部門、高校生部門、学生一般部門に分かれ審査されますが、この運営が大変なようです。現在の審査委員長は元朝日放送の和田省一さん。その前は毎日放送の辻一郎さんでした。在阪局の人たちが中心になって運営組織が作られました。これはぜひ大阪で今後とも続けていきたいし、これも在阪各放送局の協力がなければできない活動です。しかしご多分にもれず資金難で、運営が大変です。

ちょっと手前みそになりますが、私どもの二代目社長高橋信三の遺志に基づいて創設された、放送文化に寄与する活動グループ・個人を助成する基金があります。

「高橋信三記念放送文化振興基金」ですが、「地方の時代映像祭」にも活動費として、この高橋基金を助成しています。

（私は）高橋基金を助成した基金運営委員長ということで、映像祭には最初から参加しているんですが、表彰式のあとの懇親会では乾杯の挨拶がまわってきます。会場には高校生もいますので、挨拶では放送とは何か、高橋信三という人はこういう

人だったということなどいろんな話をするチャンスがあります。
それで（懇親会が）終わると、先ほどの二次会、三次会という話につながっていくわけですね。ところが最近体調をくずして、このところ参加できていません。

司会 私も一昨年までケーブルテレビ番組の一次審査を担当していました。夏の暑いさなか、20～25本ぐらい家にこもって、1週間ぐらいかけて作品を見ましたが大変です。地方のケーブルテレビの制作者はいい作品をたくさん作っておられて、非常に楽しい時間でした。
さて、いろいろなお話から、山本さんは大変好奇心の旺盛な方なのかなと思います。素朴な質問ですみません。

<震災被災地を支援 「願い事 100 叶える」活動>

山本氏 好奇心が旺盛かどうか分かりませんが、まあいろんなことに、心がひっかかるというタイプです。ひょいとひっかかる、そうすると動いてみたいという気になります。まあ人間ってそうじゃないですか。またそうでなきゃ面白くもないし、生きているということは、そういうことだと思っただけなんです。結構、好奇心にかられて、いろんなことに首を突っ込んだりします。
ひとつ面白い例をあげますと、大阪鶴見区でタウン誌を作っている若者がいます。若者といっても、もう40歳になったかな。
東日本大震災のときに、とにかく自分でやることは何か、ということで彼が考え出したのが「願い事 100 叶える」プロジェクトなんです。
震災の地で皆さんから、100個希望を聞いて、100個叶えるというプロジェクトを立ち上げたんです。インターネットの世界だから出来るんでしょうが、おもしろいですよ。例えば、ある高校が壊滅した。当然、応援団もすべてを失った。宝物である大きな太鼓もダメになってしまった。応援団に太鼓がないのは致命的だということで、太鼓が欲しいということになった。大きな太鼓だと高額のはずだが、それをどうやって手に入れたのかというと、要するに、趣旨に賛同する人たちやタウン誌の読者の皆さん、近所の人たちから少しずつ寄付してもらったりして資金を集め、大阪市内の太鼓作りのところへ行き、頼み込む。運動の趣旨をよく説明して、かなり安くしてもらった太鼓が出来あがる。そしてそれを被災地の高校に送り届けたのだという。その高校の応援団からは、太鼓をどんどん打ち鳴らしている写真を送ってきました。
このほかには、散髪の道具を失って困っているおばさんのために、彼は散髪屋をあちこち回って、中古の道具を集めて送ってあげる。そのおばさんは被災地の避難住宅で散髪を再開させることができた。彼の活動によって、おばさんの願いが実現したのです。

こんなふうにして、結果「100の願い」がすべて叶ったということでした。災害が起きて、自分に何かできることはないか、そして自分一人でなくて、いろいろな人たちをいっぱい巻き込みながら、これ叶えられたら、あの人たちは喜ぶやろな、これは好奇心とは違うんでしょ、そういうことをやれる、発想できるということがものすごく大事だと思っているんです。人間ってそういうものなんだと思います。周囲を楽しませ、喜ばせることがそれぞれの成長にもつながっていくきっかけになるんでしょね。この活動をきっかけに、この数年で彼は着実に成長しています。まあ、人生面白がってやりましょうということなのかもしれません。これからも好奇心をはたらかせて、同好会の活動でもがんばりたいと思います。

司会 最近一番気になること、あるいは面白そうなことなど何かおありですか。

<地域貢献が目標 ロータリークラブ>

山本氏 先ほど少し触れましたが、皆さんは「ロータリークラブ」に関して、どんなふうな概念をお持ちでしょうか。基本的には企業に所属したり、個人オーナーであったりといった人たちが集まって地域貢献をするというのが活動の中心なんです。財政的にはすべて会員の年会費と会員個人の寄付で賄われています。何か組織の元々の趣旨からすると仲良しクラブふうになっています。

大阪の場合ロータリークラブができてもう100年。これを機会に本来の趣旨である地域貢献をよりきっちりできるような組織なればと思っています。

全然性格が違いますが、この関西民放クラブも同じことが言えるでしょう。

楽しんでやりながらも、ひとつどこかで何か貢献しようというのがあってもいい、それぞれの局に対する貢献もあれば、地域に対する貢献、例えば災害時における何らかの活動など。

2021年度中に「大阪中之島美術館」ができますね。これが大阪ロータリークラブの100周年とつながりますので、何かその運営に反映できないかということと、それにプラス、子供の教育です。大阪は学力テストの成績がご存知のように全国のほぼ下位ですよ。

<美術館で「対話型鑑賞法」小学生が実体験>

ここに成功例が一つあります。金沢21世紀美術館です。初代館長^{みの} 豊^{ゆたか}さんは現在、兵庫県立美術館館長ですが、大阪市立美術館館長でもあったんです。当時、フェルメール展などを開催して注目を集めました。彼が館長として請われ、金沢21世紀美術館に赴任すると、1年目の来館者数が150万人、去年は230万人。これは新幹線の開通効果もありますが、普通の公立美術館などは少ないときで年間5万人、多くてもウン十万人が限度という時代背景がありました。

蓑さんは美術館の館長と、同時に金沢市の助役でもありました。そこで助役としての活動費を要望しました。当時の金沢市長（現市長）は大変文化に造詣の深い、理解のある人で予算を与えた。蓑さんは小学4年生を中心に課外活動として美術館へ連れて行ってほしいと学校を回って頼む。教育委員会も納得して美術館行きを課外活動として認める。来館した子供たちに入場券を2枚渡して、お父さん、お母さんにも見に来てよと。そういう活動を続けていって来館者はどんどん増えていったんです。義理ではなく、行ったら面白かった。仕掛けがあって。きっちり運営できた、そういう美術館なんです。

彼が言うにはそればかりじゃない。石川県の小学校の学力は全国で4位か5位あたりだったのに、一部の学科を除きトップになりました。これは子供教育の仕方の問題だと。これは彼の持論なんです、数字で割り切れる、形で決めて割り切れる、そういった教育ではもうあかんということなんです。

この発想をもとにした美術館の利用法があります。これは対話型鑑賞法という手法ですが、一学級30人とか40人の子供たちを美術館の絵の前で、何の予備知識も与えずに、しばらく鑑賞させる。そして「ハイそれじゃ、何でもいいから気づいたことを言って」と呼びかけます。最初なかなか反応しないんですが、一人しゃべり始めると、ほかの子供たちも次々に、しゃべり始めるのです。この対話型鑑賞法にはものすごく高い教育効果があります。

ニューヨークで始まって、イギリスを中心にヨーロッパでも行われています。夕方の大英博物館に寝袋をもった子供が集まってくる。一般の来館者がいなくなったあと、寝転びながら絵を見せて、対話をするというふうな教育方法があるんです。

同じことを、実は昨年実体験にこぎつけました。関西経済同友会の活動で企業の持っている絵画展を昨年2週間ほど開催した際、この手法を取り入れようということになりました。

京都造形芸術大学でこの対話型鑑賞法の授業を行っている先生がいます。講座をもっているのは、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター所長の福のり子教授です。

（昨年実験したのは）堂島フォーラムで、大学生がリードして大阪の北区、福島区を中心にした市立と私立の学校も含めて750人が参加しました。教師の関心も高く、学校でも同じような実体験をやろうと思えば可能だと言っていました。

中之島の新美術館でこの対話型鑑賞法をとったことも考えられます。

実現するかどうか分かりませんが、そんなことを今夢見ているということです。こうした活動には多くの仲間が必要です。何をやるにも単独では無理。どれだけ仲間ができるか。そういう活動を重ねることによって随所に大きな波が生まれてくるんだろうと思っています。

大阪には古くからすばらしい伝統芸能もあれば、新しいものも作っている。しかしながら、大阪ってなんやと問えば、“たこやき”とこうなる。大阪は文化の状況からいえば、京都や奈良に比べて後進国のように言われている。実は違うんですよね。その多種多様なものをちゃんとまとめて、際立った形にするための動きが絶対必要だと思います。そのためにはいろんな人たちがジョイントする必要がある。そんなふうな活動の一つだろうと思いつつ、現在やっています。

司会 本当に楽しそうにやっておられますね。大阪センチュリー交響楽団にいたときに大阪府と助成金削減問題でバトルをやりましたが、こういった発想があれば、もっともっと文化的な大阪になっていくんじゃないか。活動を大いに期待しております。

<大阪の文化イベントにもっと組織的支援を>

山本氏 そうですね。放送局もいっしょにやっていたね。

典型的な例は、大阪のメインストリートで展開されていた御堂筋パレードですが、財団法人大阪 21 世紀協会（当時）がずっと支えてくれていました。NHK と在阪民放のテレビ 5 局が連なって、一つのイベントをやるというのは極めて珍しい形です。これは大阪だからやれたと言えます（御堂筋パレードは 1983 年～2007 年）。そのあと、橋下知事の登場でどうにもならなくなったんですが、放送局の連携で言えば、今「うめだ文楽」というのがあります。

伝統芸能である文楽をより分かりやすく、楽しんでもらうために大阪の民間放送局とナレッジキャピタルが共同で開催しているイベントです。今年 5 年目を迎えます。5 局が毎年それぞれ趣向を凝らして、文楽の大衆化のために取り組んでいます。残念ながら、今 2 局が抜けて、3 局になっています。

もう一つ、大阪にとって、全体の連携が必要条件だという状況が起きているんです。東京オリンピックの開催が決まった瞬間から、文化のオリンピックというのがスタートしました。国がその活動支援のため、平成 27（2015）年度から予算設定した。

27 年度は 25 億 6000 万円、これで全国の都道府県、市町村から企画を募集したんです。その企画内容を審査して、必要な金額の最大同額支援をする。つまり、1 億円必要なら 1 億円支援する。25 億 6000 万円のうち、一番たくさん獲得したのは新潟県で 4 億 4000 万円。近畿では京都府で 1 億 9100 万円。兵庫県が 1 億 5000 万円。奈良県が 8000 万円。大阪府は応募できず当然ゼロ。大阪府は文化関係費をばさばさ切ってきた結果がこうなったんだと言えるでしょう。これはひどい。何とかならないのかと正式に申請できる体制をとるべしと多くの人が思った。とにかく、いろんな提言をしようということで、数年前、関西経済同友会で大阪の文化芸

術に関する振興策提言というのを出したんです。その中に先に述べたイベントがあるわけです。例えば兵庫県は1億5000万円取った。そのお金をどうするのかといえば、兵庫県には文化財団があつて、そこにお金を入れるんです。その文化財団は官・民で運営しています。京都にはそういう組織がないんですが、府と市と商工会議所がつながると、すぐいろんなことが出来るようになっていきます。それに、くやしいことに京都も神戸も立派な公立の器（施設）があるんですが、大阪にはない。あるのは大阪城ホールだけで、これはホールだから、文化イベントはなかなかやりにくい。

京都や兵庫には体制があつて、組織もある。大阪には何もない。やるべしという提案をして、そういう活動の流れがずっとあつて、27年度はゼロだったが、28年度は何か簡単な組織についての提案をして、大阪市が1500万円位取ったかな。とにかく何も提案できていない。国からも何か提案すべしと言われて、平成29年度になって、初めて企画を立てたわけです。大阪府が本当に珍しく、5000万円という文化予算を組み、それをベースにして、まず組織を作ろうということで、府・市・経済3団体・大阪観光局、それに関西大阪21世紀協会、この7者で実行委員会を作りました。その実行委員会が組織、企画を練り、29年度は申請したんですが、中身がなくて、国からの支援は下りずゼロ回答。しかし、お金（府の予算）があつたのでいろいろやったわけです。「大阪文化芸術フェスティバル」を平成29年10月開催しました。

企画の面で支えたのが放送局で、NHKを含めて在阪放送局9局（ラジオ局も含めて）が協力して実施したのです。かといって、新しいものを作るわけにはいかなくて、放送局が持っているもの（ソフト）を供出したのです。1年目に約40本の企画が並びましたが、そのうち約20本は放送局が提供したものでした。

平成29年にスタートして実績ができたので、昨年平成30（2018）年度は国からの予算がおりました。今年も申請した予算がおりました。大阪府の予算も5000万円から8000万円になり、1億2000万円に増えてきました。京都などからすれば、今ごろ何やっているんだということでしょう。

スローテンポですが、今やっとステップを踏みはじめたといったところです。

<都市の価値 文化で決まる 官民一体で取り組みを>

話とはびますが、近年の世界の都市文化についていえば、都市の価値を決めるのは文化なんだという言い方が出てきています。僕らも文化と経済は、都市繁栄の車の両輪だという表現を使ってきましたが、今や、文化が経済を支えて都市の繁栄をもたらすんだというふうに変ってきましたね。我が国も含めて、世界各国の都市がそういう方向で動き出しています。

文化都市活動の典型的な例がエディンバラ（英国）にあります。毎年夏を中心にエ

ディンバラ・フェスティバルというのが開催されますが、そのエディンバラに行ってきました。英国の文化政策というのは、戦後（1947年頃）新しく誕生した制度で、スコットランド、ウェールズ、イングランドの全国各地に、アーツカウンシル（半官半民、芸術評議会のような組織）を作って、英国の文化予算（国家予算）を投入しています。エディンバラ（スコットランドの首都）の例で言えば、スコットランド政府からも、エディンバラ市からも資金が提供されるし、民間からもお金が入ってくる。

アーツカウンシルはそういうお金で大きなフェスティバルを開催する。一番大きいのは、エディンバラ・インターナショナル・フェスティバルで世界的に有名な権威のある音楽祭です。小澤征爾さんも指揮したことがあります。

現地に行ってみて分かったんですが、最初に組織ができたのは、エディンバラで9つのイベントのプロデューサーたちが集まって、何かいっしょにやらないかということからはじまったんだそうです。それがどんどん実体をもってきてアーツカウンシルの発想につながり、フェスティバルが開催されることになっていったんです。街の中心にはエディンラ・インターナショナル・フェスティバルの標識がどんと建っています。

この街には、FRINGEイベントがたくさんある。大きなイベントに出られないアーティストに対して、200いくつかのFRINGEと称するイベント会場が設定されていて、世界中から芸人がエントリーして集まってくる。フェスティバルが開かれるのは、夏場が中心ですが、街角もあれば、教会のテラスもある。彼らはそこで演じるんですよ。用意されているパンフレットもおどろくほど分厚くなっています。

日本からも桂かい枝の英語落語とか、いろんな芸人が参加しています。どういふ審査か分かりませんが、彼の表現によると、五つ星（ナンバーワン）を取ったらしいですよ。

一番大事なことは、民（間）でやっても、結果大事なのは、官・民一体だということです。そのうえで、民がリードして活動を重ねていく。そういう組織がきつとその都市の格を上げていくんだと思っています。都市格を上げるということはそこに住んでいる人が楽しめるわけですよ。そのようなことができるベースになる組織を大阪に作ろうよ、文化のプラットフォーム作りをしようよと呼びかけているんですが、まだ実現に至っていません。

司会 現役時代、東京で長く営業の仕事をなさってこられました。そしていろんな番組の企画、立案、制作に関わってこられました。「仮面ライダー」「世界まるごと HOW マッチ」「まんが日本昔ばなし」「20世紀の映像」「われら世界に生きる」「中村敦夫の地球発 22時」など。東京・営業時代はずいぶん楽しい時間を過ごされたようですね。

<人気テレビ番組「仮面ライダー」はこうして誕生した>

山本氏 (番組を) 作ったというのは言い過ぎでして、関わった程度ですが、ただ、今言われた番組の中に自分の原点みたいなものがあるということに気づきました。

最初の原点は「仮面ライダー」。これは皆さんあまりご存知ないかもしれません。

「仮面ライダー」は今テレビ朝日系で放送していますが、昭和の「仮面ライダー」は毎日放送発の番組だったんです。昭和 46 (1971) 年 4 月からスタートしました。この「仮面ライダー」が誕生したのは毎日放送東京支社の営業部で、企画の話が始まったのが昭和 45 年秋以降だったと思います。

僕は昭和 39 (1964) 年入社です。昭和 43 年の 4 月に東京へ転勤しました。

毎日放送の東京の営業というところは面白い職場だったと思います。一生懸命、企画のことをやるわけですよ。

あるとき、子供の番組について話をしよう、ゲストを呼んだからと、うちの部長(箱崎)さんが言うんです。その頃僕は一番下の部員ですよ。僕の下には誰もいない。しばらくして僕のあとに河内一友君(僕のあとの社長)が来ましたが、それまでは一番ぺいぺいでした。

東京支社の細長くて暗い試写室に、漫画家・石森章太郎、少年マガジンの内田編集長、東映の平山プロデューサー、この 3 人がやってきました。そしていろいろ企画の説明がありました。この作品は面白いと。「スカルマン」というタイトルが付いて、キャラクターが「ガイコツ」でした。こんな話を営業が聞いてどうするんだろう(と思いました)。

結局そのときの結論は、“ガイコツじゃ売れんぞ ” ということで、石森さんはうーんと言って、“もう一度考えてきます”ということになりました。

しばらくして、また打ち合わせが始まりました。これが仮面ライダーだったんです。石森章太郎さんはそんなにしゃべらないんですが、平山プロデューサーと内田編集長というのはよくしゃべるんです。だけど訥弁で何をしゃべっているのかよく分からないんですよ。よく聞いてみると、芭蕉の「奥の細道」の話をしている。流行と不易という言葉、まさにこの「仮面ライダー」はそれを体現しているんだというのです。どういう意味?ということから始まって、おもしろいというんで、これ、かついでやろうと言いだしたのが東京の営業です。それで本社と掛け合って(この間いろいろありましたが)出来あがったのが「仮面ライダー」(土曜日、夜 7 時 30 分~8 時)でした。昭和 46 年 4 月にスタートして、最初のワンクール、大阪の視聴率はまあまあと言っていたが、関東はシングルで(数字が)取れないんですよ。営業で進めた企画なので責任があるやないかということで(東映と話し合った)。東映というのはしたたかなところがあって、じゃ「仮面ライダーショー」というのをつくって、全国を回ろうと手始めに東京・豊島園と後樂園で開催しまし

た。そんなことをやっているうちに、夏が過ぎると視聴率がタタッと上がりだしました。

【注】「仮面ライダー」の視聴率（ビデオリサーチ）

第1回 関西地区 20.5%。関東地区 8.1%

6か月後に関西地区 34.6%、9か月後に関東地区も 30%を超える

（社史「毎日放送の40年」参考）

（視聴率が上昇に転じたのは）ショーをやったりしたからではないんですが、ともかく、なるほどなそういうもんかと。もちろん「仮面ライダー」の制作に際しては、すばらしい制作陣がおられたからですが、ともかく「仮面ライダー」の取っかかりをつくったのは、東京・営業だなと思っています。それが原点です。

<手作りのずっしり重い企画書持ってスポンサーへ>

もう一つ原点があります。営業でも僕はタイムセールスしかやっていないんです。昭和46年4月に「仮面ライダー」が始まりましたが、その前年45年10月の日曜日10時から始まる「われら世界に生きる」という海外取材番組がありました。このドキュメンタリー番組は、あるとき、当時NET系列（現テレビ朝日系）で番組を提供していた川崎重工の広報部副部長さんが支社に突然来られて、NETでずっとやっていたが、どうも企画がよくない、毎日放送で考えられないかという話があったんです。これは面白そうやなと思っていると、私が担当することになったんです。それで企画を作らないといかんということで、当時の東京支社・報道部の副部長だった辻一郎さんに、ちょっと企画を考えてくださいよと。“いいよ”と軽く引き受けてくれました。

やがて企画が10本位出てきた。その中でいちばん最後にたった一行位の「今、世界で活躍する若者を現地取材しよう」と書かれた企画。川崎重工の副部長に“これがいい”と言われた辻さんはあわてふためいたはずです。これできるのかなと。そこからがまた面白かったんです。報道の立場からすれば、“おお、やろうやないか”この軽さですよ。営業は箱崎副部長、金になるんだったら、やろうやないか、もう一人町田さんという副部長が、東京支社編成部にいたんです。3人の副部長の中で、この町田さんが大反対なんです。編成はこんなもの、やれるかと。取材条件からみて劣悪だろうから、NOといったんです。それからこの3人が夜な夜な議論するわけです。そして最終的には大反対していた編成の町田さんがウンと言ったんです。なぜウンと言ったのかは知りません。普段仲のいい仲間の3人の副部長のことは、今でも尊敬していますが。

ということで決まったんですが、本社の報道から、そんな安い制作費ではやれないと言ってきた。しょうがないので毎日映画社というプロダクションに頼むことになったんです。ここにもノリノリの人がいて、それでスタートしました。

営業は何をしていたかといえば、ウロウロ見ているだけです。スポンサーに提出する企画書は、最後に決め打ちしないといけないので、手づくりすることにしました。スケッチブックを全部はがして、それに印刷して、表紙に「われら世界に生きる」でなく、初めのタイトルは「世界にはばたけ 日本の若者」、まあ気張ったタイトルですね。印刷所の近くの住職に筆で書いてもらって、それを表紙にして30部作りしました。重いですよ。川崎重工東京支社の広報部というのは浜松町にある世界貿易センタービルの上のほうにあったんです。エレベーターに乗って、こう立っていた、加重がかかるわけですよ。この重さ、今でも覚えています。この日は私の30歳の誕生日でした。

20歳の(誕生日の)ときは、1960年の安保騒動で東大生の樺美智子さんが国会前で亡くなったので、その抗議デモのために東京へ。1960年6月17日午前0時ジャスト、京都駅発の夜行列車に乗ったんです。これが20歳です。40歳のときは覚えていません。50、60もっと覚えていません(笑い)。

司会 “HOW マッチ”のセリフで有名になった「世界まるごと HOW マッチ」とも深く関わられておられるようですね。

<大橋巨泉は完璧主義者 「世界まるごと HOW マッチ」制作の舞台裏>

山本氏 これまた営業がらみで、いろいろあるんですが、大橋巨泉さんとは死ぬまで付き合いがありました。評判の善し悪し、いっぱいある人、完璧主義者です。「HOW マッチ」は企画立案のときから、いろいろ関わってきました。

この番組は電通ラテ局の企画部のベテラン企画マンが温めていたものです。

最初の企画会議なんかで巨泉さんが怒鳴り散らすわけですよ。なんだこれとは。一番怒ったのは、あの頃(クイズ番組などでは)答えとか数字などが電気仕掛けで表示されるようになっていたんです。それは絶対やらない、みんな手書き表示でやってくれと(注文をつける)、ほお、おもしろいおっさんやなと思いました。

この番組は木曜日の夜10時にスタートしました(1983年~1990年)。

初めの案では水曜日の夜10時のはずだったのが、巨泉さんはやってもいいが、水曜日夜10時だと絶対にやらないと言うんです。なぜかという、裏番組に関西テレビのロート製薬提供の番組があったからです。やっぱりそうか(と思いました)。巨泉は、ロート製薬提供の土曜日夜の30分番組(「クイズダービー」など)でちゃんと自分のポジションを築けたと思っているんですよ。そのロートを敵にまわすようなことはできない。それで水曜日だったらNOだという。これまた大騒ぎになった。うち発としては木曜日しかない。その木曜日の夜という、毎日放送発のドラマが編成されているので、このドラマを止めるということになります。しかし、まあ(「HOW マッチ」を)やってよかったと思います。

ところが、木曜日夜 10 時にスタートした「HOW マッチ」が途中で夜 8 時に移動することになるんです。巨泉はまた怒りました。こんなことでは、番組ののちは短いなと思ったんですが、8 時に移っても、(視聴率は) さらに伸びていきました。あのとき面白かったのはみんないろんなアイデアをもっているなと思ったことです。東京地下鉄に吊り広告を出したんですが、当時としては大変話題になったキャッチコピーで「木曜日の 8 時の巣をつついたような騒ぎ」というのでした。いずれにしても完璧主義者の巨泉は、本当に気に食わなければ、机をひっくり返して出ていきますから。「HOW マッチ」では、割とファミリーぽいタレントグループが出てきましたね。

(主な出演者 大橋巨泉、ビートたけし、石坂浩二、ケント・ギルバート)

司会 東京時代にはさまざまな分野の方々との出会いがあり、経験をされたと思います。そして大阪に戻られて、また東京とは違った経験をされることになりますね。

<放送は地域免許 ラジオ時代に自分の活動の原点があった>

山本氏 東京には人材が多いですが、大阪に戻ってきて、まず思ったのは東京かぶれしていたらあかんと。これは実感しましたね。自分が全国の放送を担っているんだという大げさですが、(東京に) 23 年間もおれば、少しは自分もやったんだという自負が出てきます。しかし大阪に戻ってくると、これは少し違うぞというふうに思い始めました。

僕は東京から大阪に戻って 1 年だけ、テレビの営業 (タイムセール) をやって、その次 2 年テレビ編成の部長、そのあと編成局長をやりました。そして平成 7 年 (1995 年) ラジオ局に行きました。

ラジオをやってみて、待てよ、これ違うぞ。(今まで考えていた放送と)。放送とはなんだ。全国波で賑やかにやるのもいいけれど、放送局というのは地域免許である。地域免許であるかぎり、地域で何をやれるかが、大事なことではないのか。

番組を作って、これでよしと思ってしまったら駄目だと。

ラジオの番組を作って、事足れりと思っていたらあかん。片隅の幸せに満足するな。もっとラジオから飛び出せ。だからラジオ番組を作るのではなくて、何が出来るかを考えるべきだと。ラジオは基本的にローカルなので、ローカルで何が出来るかを考える。ラジオはテレビで出来ないことが出来るはずで、ラジオは脱ラジオだと言っていました。

自分の活動の原点みたいなものも、ラジオの中に見たなと思いました。

というもこんなことがありました。センバツ高校野球の期間中、朝のワイド番組「ありがとう 浜村淳です」はパーソナリティーの浜村さんが番組のリスナーと一緒に海外に行くんです。

その間、ピンチヒッターとして担当した MBS の若い男性アナウンサーが当時(1989 年) TBS のオウムビデオ問題について、TBS のことをちょっと擁護する発言をしたんですね。すると、聴取者から抗議の電話が局の視聴者センターに 1 週間位殺到しました。そのうちだんだん収束していきましたが、なかなか納得しない、あるおばさんからの電話を、視聴者センターが思い余ってか、ラジオ局の制作部につないでしまったんです。女性ディレクターが対応しましたが、こじれて收拾がつかなくなりました。

そのときラジオ局長だった僕は、えらいこっちゃということで編成部長と対応を話し合いました。結局、そのおばさんの自宅(大阪府在住)に電話してお会いできる約束が取れました。そのおばさんというのは 60 歳。お孫さんと動物園へ行く予定という土曜日に、編成部長と二人で自宅に伺い、およそ 3 時間話し合いました。そこで彼女がそのアナウンサーのファンだったということが分かりました。

彼女は、彼にそんなことを言うたらあかんと、注意してやりたかったのに、それを毎日放送は組織の力で閉ざすのか。その点が許せないというのです。

その後編成部長宛に、意見をしたための手紙が時々来ていました。

放送の原点とは、そういうことではないのか、そういうものが大事だろうと感じ入った次第です。

【注】「TBS ビデオ問題」(1989 年)

TBS のワイドショー番組の制作者が、オウム真理教を批判する坂本弁護士のインタビュー映像を放送前にオウムの幹部に見せたことで問題が発生。TBS は取材源の秘匿というジャーナリズムの原則に反したと批判された。

司会 『民間放送がかがやいていたころ』の聞き取りの際、茶屋町にある社屋の 1 階フロアをもっと市民に開放しなくちゃいけないというお話をされましたが、非常に印象的に残っています。この話は今の話につながっていくのでしょうか。

<放送局の 1 階は市民に開放 “池” のあるヨーロッパ風のホールから “広場” へ>

山本氏 そうですね。茶屋町に本社ビルを建てたのは平成 2 (1990) 年、前の前の社長齋藤守慶さんで、民放の最盛期(円高不況が底を打ち、景気が一転して上昇)でしたね。やっぱり民放の位置づけをちゃんとしないといけないという意識もあったんだと思います。丁度あのころは衛星放送の話も始まっていました。齋藤社長は BS 放送のことを一生懸命やっていて“星の王子さま”と言われていました。その人が思い入れを込めて造ったビルなんです。だからビルの施設のネーミングが全部“星”につながっているんですよ。1 階のフレンチレストランはスターシップ。グッズを売っているところはネビュラ。2 階の公開用多目的ホールはギャラクシーホール。上

階に茶室をつかって星悠庵-----。その時代の放送局の良さをきっちり体現したものを造ろうという意識がありました。従って、ヨーロッパのそれなりのホテルのフロントがちょうどわが社の1階ホールのイメージでした。1階のフロアの真ん中に水回り（池）を造って、よく人が落ちました。照明も間接照明で、静かな落ち着いた雰囲気意識したものでした。これが当時の放送局のイメージだったんだろうと思います。

ただ残念ながら、僕が社長になったときには、もうそういう時代ではなくなっていました。これまでの、齋藤イズムでやってきたのとは違う流れをつくらないといかんのだろうと思うようになりました。

“星”でもない、ヨーロッパの一流でもない、大阪の“地べた”というのが大事だということで、放送局の1階はプラザ、つまり、人が集まる広場であるべし。そこで、おすおす齋藤さんのところに行って、こんなことを考えているんですと言うと、齋藤さんは、ようそんなこと考えよるなという顔をされていましたが、最後に、“いいよ、君に任したんだから”とおっしゃいました。ありがとうございますと言って、それでフレンチレストランをなくし、池をなくし、間接照明から、直接照明にして、ここ（1階のフロア）を有効に使おう、人が集まる場にしようと、変身したプラザ（広場）を齋藤さんに見てもらったんです。こうなりましたと。

そうかね。こんなふうになるかねと、非常に寂しそうで、大変申し訳ないけれど、やっぱり時代の変化だというふうに理解してもらわないと仕方なくて、納得していただけたと思うんですが。おかげさまで、今、そのプラザはいろんな使い方をしています。市民の方も大勢やってきて、茶屋町全体でいろんなイベントに取り組んでいます。

司会 人々が群れ集い、気軽に出入りできる放送局はうらやましい感じがします。ところで先ほどちょっとお話されましたが、お住まいは、ずっとこの近く（梅田）だそうですね。

<芭蕉も一句詠んだ大阪・福島の聖天通りが我がふるさと>

山本氏 福島区の鷺洲、JR 福島駅から西にむけて聖天通りという商店街があつて、そこが終わる近くにお好み焼き屋、ケーキ屋、インド料理屋があります。

僕はその一筋裏に住んでいます。ともかく、この界限というのは、ラジオの世界そのもののような感じです。未だに、鷺洲小学校の昭和28年卒業生の同窓会をやるんです。我が家の隣りの家のばあさんは、僕たち夫婦の小学校の1学年下の女の子です。時々夜帰ると、彼女が、家の前で植木をいじりながら、“雅弘くん、働くのはいいけど、体 気いつけや”と説教されます。

聖天通りの散髪屋で散髪するのですが、一回どこかで散髪してきたら、おい先月

どうしてたんやと怒られるんですよ。

これはラジオの世界だし、放送の原点やなと思っています。

聖天通りの名の由来は、聖天了徳院という真言宗のお寺がすぐそばにあって、その参拝道としてできたんです。古いんですよ。このお寺には曾根崎新地のお姉さん方が商売繁盛を願いながら、お参りに来たと言われていました。

このお寺には句碑が一つ建ってしまして、「杜若^{かきつばた}語るも旅のひとつかな」これは松尾芭蕉が詠んだ句です。松尾芭蕉の紀行文「笈^{あひ}の小文」に載っています。明石への吟行の道すがら泊ったのが聖天了徳院です。その時、詠んだのがこの句です。全国に松尾芭蕉の句碑が3000位あるんですが、本当に松尾芭蕉が詠んだ句というのは983しかないそうです。この句はその中に入っています。

司会 もう一つ伺いたいのは「スーパーリージョナルステーション」についてで、これはとびっきり地域に特化した放送局というふうに使われています。それから最後にインターネットとの融合についておたずねします。

<「スーパーリージョナルステーション」 地域に特化した放送局をめざす>

山本氏 「スーパーリージョナルステーション」はとびっきり地域に特化した局、こういうつもりで言っています。ずっとお話してきたようなことを具体化していく局であらうよということなんです。

ラジオでは脱ラジオと言いましたが、テレビでも脱テレビといっているんです。放送は脱放送だと。

放送は地域で何ができるかというのが、存在理由ですから。それをどんどん重ねて行こうやないかということと言いました。放送はその結果の表現手段なのだと。

民放60年の歴史の中で各局の皆さんも、いろんなことをやってこられたと思います。我々の局もそういう意識が先輩からつながって、地域密着の企画や番組、イベントなどをやってきました。

例えば「ラジオウォーク」は、典型的な地域の人たちを意識した企画だと思っています。

【注】ラジオ番組・イベント「ラジオウォーク」昭和57（1982）年～
第1回“飛鳥路” リスナーと歴史の古道を歩く（実況生中継）。

スタジオ公開番組「ヤンタン」も、やっぱり地域とのつながりをベースにしたラジオ番組です。

我々の局には、こうした企画を生み出す背景に、先輩諸氏のパイオニア精神があるのだと言ってきましたが、その延長線上にあるのが「スーパーリージョナルステーション」です。

自分なりにチャレンジしたのは、「オーサカキング」(大阪城公園で開催する参加型イベント)です。これは5年で終了しました。毎年、億単位の赤字を出し続けましたが、それでもみんな楽しんでくれました。これは赤字ではなくて、将来のためのファンダだと言い続けました。経営者がそんなことを言っているのかとも思いますが、みんな納得してやっていました。

「オーサカキング」は社内外にいろいろなものを残してきたと思っています。

例えば、「大阪城サマーフェスティバル」です。関西大阪 21 世紀協会が中心ですが、NHK、読売テレビ、毎日放送が入っていて、関西テレビもかつては参加していました。そういう活動組織ができています。

放送局は一局でやっても、高が知れている。集まれるものは集まる。集まる土壌はたっぷりあるのがこの地域だろう。こういう活動を大事に育てていきたいものです。

<ネットとの融合 情報伝達で実績もつ放送界がリードして進める>

次にインターネットとの融合について触れます。インターネットの世界というのは、瞬時に、世界中を駆け巡るものですが、これはあくまで通信伝達手段であって、いかに有効に使いこなすかということに関しては、やっぱり我々、放送局が担うべき役割だろう。それを捨ててしまったらダメですね。

いろんな組み方があっていいのではないか。放送と通信の融合なんて今や、だいぶ死語化してきています。“融合”は結構だが、融合するために、自分は何をやるべきか、どういうふうにリードできるのかといった基本的なところをきっちりわきまえてやっていくべきでしょう。そういう意味ではインターネットの世界で放送局がよっしゃと言えるものができているかといえば、まだまだこれからじゃないですか。地べたから、人の吐息から、町の文化から、もっともっとアプローチするのが大事だということです。

あくまで伝達手段が多様化したこのメリットをフルに生かさないといけない。

それを生かすための手法は放送界の我々しかもっていないと自負していると思います。

司会 (日本で二番目に大きなエリアをもつ) 準キー局としての放送局の役割がもっと色濃く出てもいいのではないかと思うんですが。

山本氏 そうですね。準キー局の役割としては、大阪で制作した番組を全国に送り出して支えるというのが当然あっていいんですが、それもこれも、ここ大阪から発信するというふうに思うべきです。かつては、関西弁がぜんぜん通用しなくてバカにされていたのに、今や、それどころではなくて、日本のみならず、世界でも流行っている

というのが現状ですから。

そういう時代が変わってきているので、ここでもう一度、関西のあるべき姿、何があるのかという議論を重ねていくことが求められています、しかし、あんまり難しく考え過ぎてもしょうがない。端的に言えば、自分にとって、何が一番おもしろいや、というところからスタートするのがいいんですよね。

司会 今日多岐にわたっていろんなお話を伺いました。とくに大阪の文化について、たっぷり時間を割いてお話いただきました。ありがとうございました。

次ページに第48回例会「資料」添付
「大宅壮一の“一億総白痴化”命名始末記」
(『大宅壮一選集』(全12巻)第7巻「マス・コミ」)

メディアウォッチング第 48 回例会 資料「大宅壮一の“一億総白痴化”命名始末記」

(『大宅壮一選集』(全 12 卷) 第 7 卷「マス・コミ」)

ここに古い資料があります。

人がテレビを見ていると“一億総白痴化”になると論じた評論家大宅壮一氏の評論集「大宅壮一選集」(全 12 卷) 第 7 卷「マス・コミ」(筑摩書房、1959 年発行) からの抜粋です。62 年前に書かれたものですが、その評論集の冒頭に“一億総白痴化”「命名始末記」と題された、開局間もないころのテレビに関するメディア論が掲載されています。

「私が放送、ことにテレビを指して“一億総白痴化”と書いたのはたしか昭和 32 年の初め、東京新聞の紙上だったと思う。はっきり日付を覚えていない位、フト頭に浮かんだ言葉であった。……」。“一億総白痴化”は当時“よろめき”と並んで二大流行語になり、世間を騒がせることとなります。

大宅壮一氏は「あだ名は、あくまであだ名であって、その人のすべてではないと同様、放送がすべて“白痴化”番組というわけではない」と断ったうえで、「放送関係者にあらぬ迷惑をかけた面もあったかもしれない」とも記しています。

この評論(約 9500 字)は後半「チャンネル文化」というサブタイトルを付け、当時(昭和 32～33 年)のテレビメディアについて、特にその特性に視点をおいた鋭い分析を行っています。

「この二十世紀文明の一つの頂点を示すテレビが、どうしてこんな大きな魅力と威力をもつのであろうか。それは人間の総合的感覚に訴えてくる強さによるからだ。ラジオは聴覚のみに訴えるものだが、単なる音楽の場合を除いて、いや、その場合でも、演奏者や楽器やその情景などを知りたいという気持はおさえられない。それを満足させるのがテレビである。さらにテレビの魅力は、組み立てられ、演出されたものだけでなく、生の、新鮮な実況中継に、その発達したレンズを使用して、もっとも大きな効果をあげている。

それと同時に、視聴者の多くが愚劣なテレビ・ドラマや露骨な宣伝広告に対して、つまらない、つまらないといいながら、いつのまにか、魅きつけられてしまっていることも忘れてはならない。現代文化の最高作品であるテレビが、かえって文化を後退させるのではないか、つまりあまり感覚的、直接的でありすぎるので、人間の知性を失わせる、つまり白痴化させるものでないか、という疑問がでてくるのである。現状においては、テレビは“一億総白痴化運動”をおこなっているようなものだという私の説もそこからきている。(中略)

しかしテレビは人間の理性の産物である。いずれ日本でも天然色テレビが普及することも考えて、現在のグラマー・ガールのような傾向しか表現しえないとしたら、そこから生まれる理性と感覚の分裂は、人間の文明にとっては、大きな不幸をもたらすであろうことは疑いない。過渡期のわれわれにとって必要なことは、テレビの魔力に負けることなく、やはりその番組をしっかりと選ぶよりほかない。

日本のラジオ・テレビは数年後に開局 70 年を迎えます。